

四旬節黙想週間

林 和則神父

今年の四旬節黙想会は三月十日の週に三回の講話と十字架の道行きで行われました。キリストご復活前の十字架のご受難の苦しみを偲ぶ典礼での三回の講話の概要を改めて思い起こしましょう。

第一回講話「あなたは塵であり、塵に返りなさい。」

聖書参考箇所…創世記2章4節—3章19節

アダムとエバは神と人、人と人、人と全被造物との完全な信頼関係の中に生きていました。「二人とも裸であったが、恥ずかしがりやしなかつた(2:25)」はそれを象徴的に表しています。「裸」は「ありのままの自分」と言い換えることができるでしょう。弱さと欠点に満ちた自分を隠すことなく、さらけ出し、でも「恥ずかしくない」というのは相手への完全な信頼があつてこそ可能になります。

エデンの園が「楽園」であつた「場所」ではなく「関係性」にあつたのです。

けれども、アダムとエバは「神のようになりたい」という高慢と支配欲によつて、その「完全な信頼関係」という「関係性」を壊してしまいました。その結果、相手への不信と恐怖が生じてしまい、人類は「楽園」を失つてしまつたのです。

「塵にすぎないお前は塵に返る(3:19)」は呪いの言葉ではなく「自分の弱さと罪を認めてへりくだりなさい」という神からの呼びかけ、招きなのです。私たちは自分の弱さと罪を認めることによつて、神に立ち帰ることが出来ます。「塵」である私たちは神の恵みによつてしか生きていくことができないからです。

第二回講話「自分の独り子である息子すら惜しまなかつた」

聖書参考箇所…創世記22章1—18節
アブラハムは百歳にして

初めて正妻であるサラとの間に男の子を得ました。アブラハムにしてみるとまさに目の中に入れても痛くないほど愛おしい子であつたことでしょう。けれども神はその独り子を焼き尽くす捧げものとするようにとアブラハムに命じます。

アブラハムがどのような思いであつたのか、それについての心理描写は全くありません。上には刃物を振り上げた時に神は「その子に手を下すな(22:12)」とアブラハムを止めます。そして言われます。

「あなたは、自分の独り子である息子すら、わたしにささげることを惜しまなかつた」実はこの時、神はアブラハムを通して、人類に次のように約束してくださつたのです。

「わたしも、自分の独り子である息子すら、あなたがたのためにささげることを惜しまない。」

それが神の子が人間イエス

となり、十字架の死を通して

ささげられたことによつて実現したのです。忘れてはならないのは、神はイサクがささげられることを止めてくださいました。けれども人類はイエスがささげられることを誰も止めなかつたのです。人間であるイサクは生き、神の子であるイエスは死んだのです。

第三回講話「主の日——新たな安息日」

聖書参考箇所…創世記1章1節—2章3節

創世記1章の天地創造の

物語は「バビロンの捕囚(紀元前607—539年)」の時代に祭司たちによつて書かれたと考えられています。バビロニア帝国によつてユダ国が滅ぼされ、神殿も灰燼に帰し、主だった民がバビロンに連行され、捕囚の生活を送ることになつたことは、ユダヤ人にとつて国家の消滅だけでなくイスラエルの神への信仰の危機でした。イスラエルの神がバビロニアの神々に「敗北」し

たように思え、また、それま

でのユダヤ教の信仰また礼拝の中心地であつた神殿がなくなつてしまいました。まさにイスラエルの宗教は存亡の危機に立たされたのです。異国の地にあつて絶望と混沌の中にあつたユダヤの民に「光あれ(1:3)」と祈りをこめて呼びかけたのが、この物語だったのです。ここにはユダヤの民のアイデンティティ、そして信仰の「再生」への祭司たちの願いと祈りが込められています。ですから実はこの「創造」はバビロニアの侵略によつて滅び去つた「世界」の「再創造」だったのです。私たちもこの四旬節を通して、現在の傷つき混沌とした世界がキリストの復活の「光」によつて新たにされるように祈りましょう。

(ご報告 宣教委員 山本真義)

